

創造的表現の開発

— 第1学年「たんとんにのって」の実践を通して —

登 浩 二

1. 豊かな感性を育む音楽学習創造のコンセプト

(1) 創造性への第一歩

「幼児が大きく見開いた目で、周囲のものに見入るのを、じっと観察したことがあるだろうか。われわれの意図とは無関係に、教育はまさにこのように早期に自然に始まるのである。また幼児が手につかめるものは何でも、いじくったり、しゃぶったりすることや、どんな音にも口を開けて聞き入ったりすることが、目に見えない遊星の発見とか計算機の発明となり、あるいは偉大なる絵画の制作とか、交響詩やオペラの作曲となるような連続への第一歩である。」イギリスの哲学者スペンサーは『教育論』の中で、創造性への第一歩はこのような形で示される事を述べている。

新しい学力観では自ら進んで考え、主体的に判断し自信をもって表現したり行動したりすることができる資質や能力を育成することを目指している。すなわち自ら学ぶ意欲や態度、思考力、判断力、表現力などを学力の基本としている。しかし、スペンサーは新しい学力観の基本となる部分は就学前の子どもがすでに遊びの中に持っていることを述べている。もしこれが真実であるとするならば幼稚園や小学校ではこれを育て豊かにしてやればよい。つまり、そこから始まるのではなくて各子どもの中に機能はすでにあるということになる。家庭生活の影響により、伸長の程度に差があるにしても、その機能が潜在していることは事実であろう。もしそれらが、消滅していたり破壊されていたりしたら、教師の仕事はこれを前にあった形に戻してやることではなからうか。

(2) 感じるとは

ニュートンはリンゴの木から実が落ちるのを見て、引力を発見したと伝えられている。しかし、リンゴの木からリンゴが落ちる様子を最初に見た人がニュートンであったわけではない。ここで大切なことは、リンゴの実が熟すると、やがて木から落ちるという当たり前の現象に、ニュートンが価値を見つけ問題意識を持っていたということである。そして、ニュートンは幾日も幾日もリンゴの木を見続けたに違いない。リンゴが木から落ちる様子はニュートンの頭の中に、ひとつの強烈なイメージとして残り、そのことは、家に帰り着いてからも走馬灯のように彼の頭の中を駆け巡ったことであろう。そうした、一連のプロセスが引力の発見へと実を結んでいったと言えるであろう。

授業を行っている時、教師が予想もしなかった事柄に子どもたちが価値を見だし、そしてそのことへと没入して行く様子は、よく見られることである。しかし、だいたいの場合においてそうした子どもたちは、集中力に欠ける子どもとして捉えられてしまい、否定の対象となっても肯定の対象となることは少ない。「手悪さをしないようにしましょう」「先生の顔を見て授業を受けましょう」「よそみばかりしてはいけませんよ」「ぼうっとしていて先生の話を聞いていませんでしたね」などの言葉がそれである。もちろん、生活上の指導として、そうした言葉が必要な場面もあることは認める。ここで注意しなくてはならないのは、子どもがまったく教師が意図していなかった全く新しい事柄に着目し、そのことについての、創造のプロセスに没入していた場合の見きわめである。ニュートンにとってリンゴの木に興味を持った場所が、日本の学校でなかったことは幸いであったかもしれない。少なくとも、彼の育ったイギリスには、宇宙には絶対の真理があり、その真理が人間の存在自体をも支配しているという徹底した信念がある。価値あるものに気づくという作用は集団から切り離されたまったくの個性的な作用である。そして、そのものの価値へ向かうという行動

もまったくの個性的な作用である。このことが、反社会的な内容でない限りにおいてこれら一連の営みは、良いとか悪いとかといった画一的、一面的評価は不可能であろう。このように考えていくと、これからは「価値あるものに気づき、それに向かう感情を高めていくこと」を支援する学習過程が求められていくのではないだろうか。それはすなわち、子どもたち一人一人のこだわりを大切に学習を進めていくということではないかと考える。

(3) 直観の具現化へ向けて

「先生、ヒヤシンスは魔法使いだね」

「ほう、どうしてそう思ったの」

「だって、最初お店に買いに行った時には、小さな汚いタマネギみたいだったでしょ、それが今ではこんなにきれいな花のブーツになっちゃったんだもん」

子どもの表現は、常に直観的である。見た物感じた物そのままがそのままの表現として現れる。たいへん鋭くかつ即興的な表現である。しかしなぜか中学年を経て、高学年へとさしかかる頃にはいつの間にかその鋭さを失い鈍化してしまいやすい。それではどうして美しいものに触れていても美しいと感じる働きが鈍ってしまうのであろうか。音楽教育は、21世紀に活躍していく子どもたちをどのような側面から支援していく必要があるのであろうか。それは、まず直観の一番鋭い幼児期から児童期における感情面の伸長を図るための学習が積極的、意欲的になされること。そして、これまで児童の自発的な表現そのものが重要視されてきた弊害を改め、児童の自発的な表現そのものを重要視するのではなくて、そこに至るまでの過程や自発性に対する支援、より良いものへと高めていくための支援を大切に、表現へと向かう児童のプロセスを重要視していく考え方への、発想の転換ではないかと考える。

2. 指導事例 第1学年「たんとんにのって」

(1) 指導にあたって

最初は美しくなくてもいい、へたでもいい。児童が命を奮い立たせて歌うところから音楽が始まるということが大切である。命を奮い立たせて歌うとは、ただ声を出して歌うという意味ではない。元気のよい声もあろう。か細い声もあろう。怒鳴り声もあろう。つぶやくような声もあろう。児童の自由な感情や発想を押さえてはいけないということである。素朴な感動を大切にして、教師が児童に技術的な教え込みをする前に、まずは、児童たちの表現のあるがままを素直に受け入れるところから出発させなくてはならない。それは、とにかく音楽する喜びを児童に知らせようということが常に基本になくなくてはならないと考えるからである。

今回の学習指導要領の改訂は、生涯学習の基礎を培うという観点に立ち、幼、小、中、高という一貫した教育課程を見直していこうとするものである。すなわち、人間の成長発達の見方から教育は下から上へと順次積み重ねられ、下から上へと接続していくことが十分に確認されたものであると考えられる。これまでの幼稚園教育要領では、「健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画制作」といった、いわば教科的な六領域が示されていたが、今回の改訂で「健康・人間関係・環境・言語・表現」という五つの総合的、生活的な領域へと改訂された。これは、生涯学習の基礎段階としての幼児教育の重要性を背景として、より総合的で幼児の生活に根ざした内容を示唆しているといえよう。

平成2年度から幼稚園の新教育要領が実施され、今年度の一年生は入園時より新教育要領で保育されてきた、いわば第一期生となるわけである。次に、その児童の実態を音楽の授業を通して考察してみることにしよう。

○ 歌うとき、みんな同じような「よい姿勢」で歌い、表情が一様に同じ。

- 階名や楽譜にこだわり、ピアノやオルガンの伴奏がないと声が出にくい。
- 鍵盤ハーモニカが弾けた、タンバリンがリズムにあってたたけなかったけど、できたかできなかったを非常に気にする。
- 口があきにくく、口をしっかりと動かして歌うことができにくい。

大きくわけて、以上の四つにまとめられるが、これらを一言で言うならば「頭で音楽しようとし、体で音楽することができにくい」といえるであろう。そして何かしら、教科的な音楽を幼稚園で経験してきていることを強く感じるのである。

児童の自然で、のびのびした動きをリズムカルに発展させ、創造的表現力を身につけるには、児童の生活経験をよりどころとして、見たこと聞いたこと、感じたこと考えたこと、または身体で感得したリズムを自由にのびのびと表現できる環境づくりが大切である。また、児童にはあくまで楽しい遊びと感じさせながら、基礎となる動き（速度感、強弱感、拍子感など）が正確に身につくよう指導を深めていく必要がある。そして、児童の興味・関心をとらえ児童の生活に即して経験を生かし、歌唱や器楽、リズム打ちなどの総合的な取り扱いの中で表現を楽しみつつ、知らず知らずのうちに基礎能力が身につく、併せて音楽性が高まり、創造的な表現が伸びていくように指導の工夫をしていきたい。

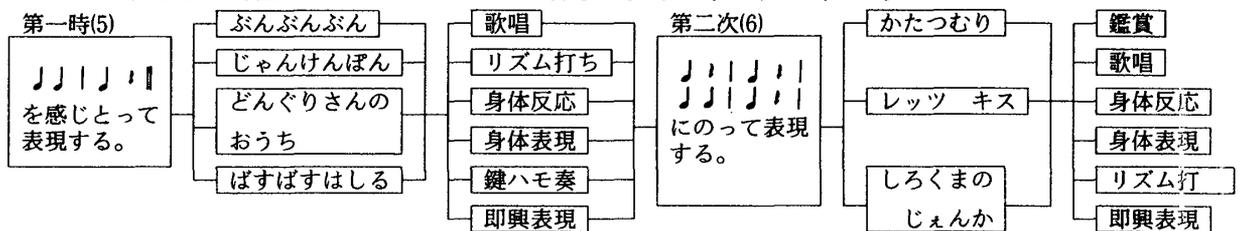
(2) 題材について

二拍子は四拍子の基となる拍子である。そこでまず、単純な二拍子の拍子感を身につけるとともに、身体表現の基礎となる拍子感を養いたい。強弱の反復を、規則正しい速さで感じ取ることができるようになると、二拍子の拍子感が身についたといえる。そして、身についた拍子感は、児童が足並みをそろえて歩くときなどに大切な要素となってくる。そこで、範唱や範奏をよく聴いて、曲に合わせて歩いたりリズム遊びをしたりすることができるように、日常生活における様々な遊びをより音楽的なものにしていきたい。そして、愛唱歌や既習曲にあわせて体を動かすことを日常化したい。本学級には、これまでの音楽経験の違いなどにより、身体表現を好む児童や体で表現しにくい児童がいる。そこでのびのびと歌ったり、自分の思い思いのいろいろな表現をしやすい雰囲気をつくることにより、児童一人一人が生活の中で音楽を楽しめるように配慮してきた。本題材においても、美しい自然の音を耳に傾ける心情を養うことができるように心がけ、毎日の生活の中で児童とともに新しいものをつくりあげていくように努めたい。

(3) 指導目標

- ① 歌詞の表す情景や気持ちを想像して表現させるとともに、即興的に音を探して表現させる。
- ② 拍の流れやフレーズを感じ取って鍵盤ハーモニカを演奏させたり、音を探して表現させる。

(4) 指導内容と計画 …………… 11時間（本時 第二次 第2時）



(5) 評価の観点

音楽への関心、意欲・態度	拍ののって歌ったり動いたりすることを楽しむことができる。
音楽的な感受や表現の工夫	拍の流れを感じとって表現することができる。 自然環境の中の音を見つけることができる。
表現の技能	拍の流れののって遊ぶことができる。
鑑賞の能力	拍の流れを感じとって、聴くことができる。

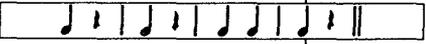
(6) 本時の目標

二拍子の拍の流れにのって楽しく表現できる。

(7) 準備

シンセサイザー、CDデッキ、歌詞カード、白熊の耳・爪の模型、ボール、リング

(8) 指導過程

学 習 過 程	指 導 上 の 留 意 点
<p>1</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">好きな歌を歌う。</div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">口形</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">リズム</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">姿勢</div> </div> <p>2</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">リズムにのって体を動かしながら楽しく歌う。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px; text-align: center;">リズムあそび</div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">リズム模倣</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">リズムの工夫</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">ことば</div> </div> <p>3</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">覚えた歌をリズムにのって遊びながら楽しく歌う。</div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">じょうまが しづまが</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">即興表現</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">身体反応</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">リズム打ち</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">歌唱</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">身体反応</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">リズム打ち</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">歌唱</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">歌唱</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">器楽</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">音づけの表現</div> </div> <div style="text-align: center; margin-bottom: 10px;">  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">おわりの歌を歌う。</div>	<p>1 好きな歌を空に届くように歌わせることによって学習の雰囲気盛り上げる。</p> <p>◎姿勢や口の開き方などで望ましい児童を誉めて自信を持たせる。</p> <p>・児童のがんばりを評価し、本時の目標を告げる。</p> <p>2 軽快な2拍子のリズムを視覚、聴覚の両方から立体的にとらえさせると同時に、リズムにのって歌う心地よさを味わわせる。</p> <p>・心地よさをもとに身体表現へと向かわせる。</p> <p>3 ◎それぞれの曲想や歌詞を生かして表現させていくとともに、一つの歌い方に収束させるのではなくその子なりの歌い方も認めていく。</p> <p>その子なりのこだわった身体表現も認めていく。</p> <p>・遊ぶことで、身体全体でリズムを感じさせる。</p> <p>・友達と関わりながらリズムにのって楽しく遊び合わせる。</p> <p>4 学習の終わりの雰囲気づくりとして、毎時間位置づける。</p>

3. 分析と考察

(1) 好きな歌を、空に届くように歌おうよ …… 学習過程 1

子どもが自然に遊んでいるとき、それが積極的な子であろうと消極的な子であろうと極めて明るい表情で自分たちの世界を満喫している。そして、周りのことには一切関心がないと言わんばかりに自分たちの遊びに集中しきっている。これが心理的に解放された状態なのだなと思う。音楽の出発点をこのような心理状態に求めたい。音楽は素朴に「歌いたいな」という気持ちから出発させたいと考える。それではどのような歌を歌うことから出発させればよいのであろうか。教室で校庭で子どもたちが自然と口ずさんでいる歌を集計してみた。

集計時期（4月19日～5月22日） 対象児童（1年生90名） 収集事例81例

コマーシャルソング19例（24%）	スポーツの応援歌16例（20%）	
アニメなどの挿入歌13例（16%）	娯楽番組などの替え歌12例（15%）	
流行歌7例（8%）	童謡・手遊び歌6例（7%）	みんなのうた6例（7%）
クラシック2例（3%）		

実に83%の児童がいわゆる世俗的な大衆歌謡につかっている現状が浮かび上がってきた。それらはそれで児童の興味関心を捉えているのであろうが、83%という数字は、歌を口ずさみたいという感情がふっと生じた時、コマーシャルの歌ぐらいしか思い浮かばないといった音楽に対してまったく未開の児童が相当数存在することを示している。音楽は歌だけみても、行事の歌、集会の歌、一日の歌、四季の歌、日本民謡、外国の歌、世界民謡、国歌、歌曲、朗詠・詩吟などといった幅広いジャンルと多様性をもっている。それらの歌の存在をまず知り、自分のものとしていく学習が何よりも優先されるべきではないかと考えた。ここでは、「ひろがれうたのつばさ」をテーマに年間を通して100曲の歌を知ることを柱としている。『みんなのうた』の中から自分の歌いたい歌をリクエスト形式で選び5曲程度どんどん歌っていく。選ばれる歌はすべての児童が知っている歌ばかりではない。しかし何度も同じ歌がリクエストされるたびに、耳から覚えていきやがて自分の歌としていく活動である。ここで、児童が選曲する基準について集計してみた。

集計時期（9月） 対象児童（1年1, 2組79名）

知っているから26名（33%）	幼稚園でよく歌っていたから16名（20%）
歌ったり聞いたりしたことがあるから10名（13%）	
お母さん（お父さん）が好きな歌だから4名（5%）	先生がよく歌っているから3名（4%）
なんとなく好きだから3名（4%）	みんなで歌いたから2名（3%）
無回答15名（18%）	

これは、児童にとって難しい質問であったようだ。そもそもあるものが好きとか嫌いという感情は理由づけをするのが困難な場合が多い。この結果から推察できることは、児童がある歌が好きになるために、音楽経験の豊かさ（いろいろな歌を歌ったことがあるか）整った音楽環境（周囲に音楽的雰囲気があるか）が必要な事が分かる。そして、それと同時に大切なことは、人とのかかわりの中で好きな歌は本当に自分のものとなっていくということ。すなわち、生活の中から音楽する喜びは生まれ育まれていくということを示唆しているのではないかと考える。好きな歌を空へ届くように歌う学習は、音楽の授業の導入としてはもちろんのこと、給食時のいただきますの歌として、生活科で探検にでかける時の出発の歌として、特別活動のゲーム大会の歌としてどんどん生活のあらゆる場面を捉えて歌っていった。そのうち、整列して体育館や畑に移動する時などに「待っている間に歌を歌いましょう」という形で児童から自然発生的に歌が出てくるようになった。ここで再び教室や校庭で子供たちが自然と口ずさんでいる歌を集計してみた。

集計時期（11月14日～12月17日） 対象児童（1年生89名） 収集事例117例

スポーツの応援歌23例（20%）	アニメなどの挿入歌21例（18%）	
みんなのうたなどの既習曲19例（16%）	コマーシャルソング18例（15%）	
娯楽番組の替え歌15例（13%）	童謡・手遊び歌10例（9%）	流行歌6例（5%）
クラシック5例（4%）		

前回の調査と比較してみると、自然とよく歌うようになってきたといえる。また、前回と比較してコマーシャルソングしか歌わないという児童は減り、それも口ずさむが「南の島のハメハメ大王」や「ひらいたひらいた」も好きといった選択の多様性が見られるようになったことがいえると思う。

以上のことから、音楽的に児童を育てていく要素の一つとして、歌い込む曲数が大切であること

がいえるのではないかと思う。今回は多少乱読気味にどんどん歌わせてみた。それらの歌は少しずつではあるが、児童の生活の中に溶け込み教室や校庭から低俗なコマーシャルソングや流行歌を駆逐しつつある。日本の経済的発展のための礎たる消費活動、そしてその消費活動促進の要請として生まれてくるコマーシャルソング。今までそれらは、児童の音楽性を害するものと決めつけていたが、今後はそれらの価値を見いだす努力もある意味では必要になってくるのかもしれない。音楽に対する多様性を児童に求める以上、指導・支援者もまた多様な価値観に対応できる素地をつくることが大切であることを感じた。

(2) かわいいかたつむりがいっぱいいるね …… 学習過程 2

葉ずれの音、風の音、雨の音、音素材を自然界から求め、見つけた音を自分の体を楽器として表現を工夫していく学習である。かたつむりが生育するためには、自然界の様々な生命や現象が支えとなり、それらはすべて音をもっている。これらを見つけ、その見つけたものを表現するためには技能よりも感性が重要となってくる。まず自分が感じたことを、自分の手や口や足のすべてを使って工夫して表現してみる。そしてどうしても表現し



きれない部分をやむにやまれず楽器で補助する。それが音楽であろう。こうした学習は低学年だからこそ重要であり、この時期にたっぷり楽しむことが必要であると考える。

T.「かたつむりさんがうれしそうに空を見上げています。おおっ、やっと僕の大好きな天気になってきたぞ。」

C.「雨だ。雨が降り始めるんだよ。」

C.「ぴちゅ、ぴちゅぴちゅぴちゅ」

「ぴちゅ、ぴちゅ」という音は、唇と舌を使って音を出す。それは、たとえば赤ちゃんが哺乳瓶を吸う音に似ている。この表現は、最初はいきなりざあっと雨が降り始める音の表現であった。しかし、児童の中に、雨はいきなり降り始めるものではなくて、最初は少しずつ降り始めてだんだん大降りになると、雨の降る様子を発表した児童がいた。そこで、雨が降りそうな曇りの日に雨がどのように降り始めるかを観察してやることを全員に課題として出した。その結果雨が降る前には遠くで雷の鳴る音がすること、最初は赤ちゃんの雨が降ってきて次にお兄さんの雨、そしてお父さんの雨が降ってくるなどの気づきが出された。そうした生活から経験した（気づき感じた）音をお互いが発表し合い、表現へと結び付ける学習の過程を通して表された音である。

C.「ピカッ ゴロゴロ ピカ ゴロゴロゴロ」(だんだん大きくなっていく。)

C.「ドーン ゴロゴロゴロ」

遠くから何か近づいてくる様子はどうであるか。この表現はむずかしかったが表すことにこだわった児童がいたので、その子が興味をもっているF1レースを取り上げ、レーシングカーが遠くから近づいてきて自分の前を通り過ぎそしていってしまう音を繰り返し聞いてみる活動を採り入れた。その結果、何かだんだん近づいてくる時は、音がだんだん大きくなっていくという表現が生まれた。ドーンゴロゴロという雷鳴は、掃除の前にみんなが机を下げる時の音に似ているという気づきが出された。これを発表した児童は机をこすって音を出しているがその他にも、机をたたく児童、叫びながら飛び上がる児童、雷のときはカタツムリさんも怖くて殻に入っているからと、机の下へもぐりこむ児童などに別れる。

T.「ああっ、雨がいっぱい降ってきたよ」(『かたつむり』前奏スタート)

これら一連の表現活動は最初から意図されたものではなかった。ここでは、『かたつむり』を指導

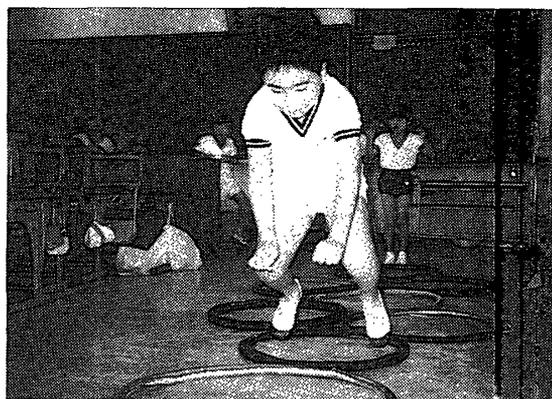
するにあたって、導入の段階で歌詞の内容を理解させ、カタツムリにたいする関心を深めさせるための手段としてこうした活動を計画していた。しかし、活動を積み重ねるに従って「カタツムリさんは雨が好きだよ」という教師の発問から雨に対するイメージが児童の中にどんどん広がっていった。そうして、この活動を大切にしていけばいくほど『かたつむり』の歌は児童の内面へと溶け込んでいった。児童の一人に「雷さんのドッカンという音、すごかったね。おへそを雷さんにとられたら大変なので先生もおへそを手で隠しちゃったよ。」と声をかけたところ「だってね先生、雨がいっぱい降った方がカタツムリさんが気持ちよく、つのを出したり、目玉を出したりできるでしょう。だからぼく、カタツムリさんがうれしい気持ちになれるようにいっぱい雨が降らせてあげたんだよ。」と答えてくれた。これがうたごころというものであろう。そして、うたごころは生命に対する尊重の態度や自然に対する敬愛の情もまた、育み得る可能性を示唆している。

児童の音楽性とは何を示すのか、そしてどのような理想像をもって音楽指導を行っていくべきなのか。それらは、以外とあやふやなものである場合が多い。まずそのことを反省するとともに、この活動に参加しにくかった児童すなわち、歌は歌うが雨の音みつけの表現の場面では、自席で他の児童の表現の様子をみているだけだった児童の内面の変化に常に関心をもち続け、どのような場面をとらえて、どのような支援を行っていくべきかについて、さらに研究を深めたい。

(3) かあさんの しろくまさんは のそのそどたばたばったん …… 学習過程 3

リズムを体で感じ自分のものとして表現していく。しかもそれが、わかりやすい形で視覚的に捉えられるものとして、自転車の古タイヤを使い「たんうん」を「けんぱ」で表現する学習を取り入れた。組み替えが容易で、基本のジェンカステップにあきたらず、別のステップを即興で工夫する児童も多く、リズムの体得には有効である。こうした活動を継続しているうちに、ただリズムに合わせて飛ぶだけでは飽き足らない児童がでてくる。「今日は、カエルさんで飛びたい」「ダチョウさんでもできるかな」こうした学習に向かう主体的な姿勢が育つまで待つことが、導入であると考え。『しろくまのジェンカ』を学習するにあたって、「個で表現する楽しさをもとに、その範囲を広げ質を高める過程を通して、集団で遊ぶ楽しさを経験する。」というねらいのもとに、次のような学習ステップを設定した。ステップ①ジェンカのリズムを体得する。ステップ②自分の好きなものになりかわって、体得したリズムをもとにして遊ぶ。ステップ③好きなものの一つに白熊を加え、関心を深める。ステップ④『しろくまのジェンカ』で、氷の上を白熊になって遊ぶ。ステップ⑤個の表現をジェンカ遊びを通して集団化する活動により、一つのまとまりとして表現する経験をもつ。本時はステップ③の1時間目にあたる。

- T.「ねえ、ところで白熊さん 知ってる？」
C.「知ってるよ。氷の上に住んでいるんだよ。」
T.「そうだよ。よく知っているね。それじゃあ
ほんとの白熊さんを見たことがある人。」
C.「はぁい。動物園で見た。」「テレビで見た。」
(ほぼ、全員が手を挙げる。)
T.「白熊さんの大きさはどのくらいだった？」
C.「これぐらい。」



机についたまま、手で大きさを示す。犬ぐらいの大きさを示す児童もいる。立ち上がってこれぐらいと手を一杯に広げて表そうとする児童もいるが、それでもツキノワグマぐらいの大きさである。それもそのはずである。広島県には白熊（北極熊）はいないのである。中国地方では、山口県の徳山動物園と岡山県の池田動物園にだけである。すなわち、児童がイメージする白熊の多くは、テレビで見た等の疑似体験がもとになっている。

- T.「これがね、本物の白熊さんの耳の大きさだよ。そしてこれが、つめだよ。」
- C.「うわぁ、でっかい」「ぼくの耳が10個ぐらいだよ」「ええ あんなにでかかったっけ」
- T.「次にね、隣の人をおんぶしあってみてごらん。」（席が隣の児童同士で互いにおんぶし合う）
- T.「1号車と2号車のお友達20人ほど前に出て来てちょうだい。白熊さんの体は、前にいる人たち20人をおんぶしたのと同じ重さがあるんだよ。」
- C.「すごいやぁ」「つぶされちゃうよ」「小錦よりでっかいのだな」
- T.「先生は実は魔法使いです。今から君たちを白熊さんにしちゃうぞ。ちちんぷいぷい それっ」

この後、白熊になってジャンケンをしたり、CDに合わせて既習曲で踊る活動を取り入れた。重そうに足を引きずって歩く児童、床で手を広げてゆったりと泳ぐ児童など、緩慢な動作で大きさを表現する児童が多い。白熊は北極に生育し、体長が雄で2.2~2.5m、雌で約1.85m。耳の大きさが9~11cm、つめが3~6cm、それに対して白熊の赤ちゃんは、生まれた時は体長約30cm、体重600gそれが3~4カ月で約22.5kgまで成長する。そのことを次時で知らせ、赤ちゃん白熊の表現へと発展させる計画であった。しかし本時が終わった後、白熊に興味をもった児童が図書館でそれらのことを調べたり、白熊や北極の動物が主人公の絵本を借りて来て、その挿絵をヒントに休憩時間などに白熊ごっこをして遊ぶなどの活動へ自然と広がっていった。また、日曜日に家族で徳山動物園に出掛け、実際に白熊がえさを食べたり、泳いだりする姿を見て来た児童は、予想していたよりも動きがすばやかかったことなどを実際に教壇で表現しながら発表してくれた。

この学習はジェンカのステップに乗って遊ぶことにより、個の表現を集団の表現へと高めて行く経験をすることが大きなねらいであったが、児童はそれよりも白熊そのものの生活に興味をもち、そのことを表現することにこだわっていった。そして、「白熊さんが僕のジェンカを聞いてよと、仲良しのペンギンさんとアザラシさんと呼んで来ました。みんなで楽しく踊っています。」とアザラシとペンギンになってジェンカステップで踊る児童と、白熊さんになって歌う児童に分かれて表現したり、あるいと、「白熊さんが、赤ちゃんをつれてお散歩にでかけました。」というように、白熊の世界をテーマに自分たちなりのイメージをつくり、その中で表現を楽しみ、そしてお互いに発表し合う活動へと向かった。そのため、当初計画・設定したステップ⑤は、特別活動における「望ましい人間関係の育成のための適応活動」と関連づけて計画し直し、題材「みんなであそぼう」として、特別活動で実施した。この活動はその後、健康観察の場面で元気なときは、白熊さんになってのし歩きながら「はい、元気です」と答える。調子が悪いときは、アザラシさんが畏にはまって苦しんでいる様子を表現しながら「かぜをひいています」と答えるといった形などで、一部の児童の生活の中に溶け込んでいる。

4. 今後の展望

わたしの授業を見られた参観者の方から「これでも音楽か」「こんなことが音楽なのか」という感想を戴くことがある。その時わたしは、楽譜が先か感じ表現することが先かについてお話しすることになっている。白熊の表現にこだわって取り組んでいた児童の一人は、思う存分白熊になって跳びはね、おなかのすいた白熊、元気一杯の白熊になって歌った。そして次には『しろくまのジェンカ』を鍵盤ハーモニカで弾きたいと一生懸命練習し発表した。これまでの音楽教育がいわゆる音楽文化や技能の伝達という現実的役立ちの中から情操を育むことをねらっていたことに対して、これからは、音楽に対する豊かな感性を育てるといふ本質的役立ちの追求の過程において、現実的役立ちの部分の伸長をはかっていくことが求められている。音楽である以上は、技術性や法則性を無視する訳にはいかない。音程や技能ということも大切である。そこに初めから視点を置くのではなくて、教科目という縛られた状態から児童を解放して自由に音を楽しむことが、わたしの願いである。